

近代の上諏訪における温泉・スポーツ複合型観光地の 形成と湖畔利用

Formation of Hot Springs Resort Area and Change in Coastal Area Use with Introduction of Modern Sports around Lake Suwa

佐藤大祐*
 SATO, Daisuke

Abstract: This paper investigates the formation process of the tourist area in Kamisuwa Hot Springs around Lake Suwa by analyzing the social characteristics of landowners and general social conditions. We collected basic data from the cadasters and newspapers of the Meiji, Taisho, and early Showa eras. Since the construction of the railway and the introduction of ice and water sports in the mid-1900s, the number of tourists from metropolitan areas, such as Tokyo and Nagoya, to Kamisuwa rapidly increased. At the same time, the silk industries developed, and their founders established second homes and hotels in the tourist area. As a result of these overlapping factors, formed a compound tourist area containing hot springs and sports around Lake Suwa.

Key words: 温泉地 (hot springs resort area), 近代スポーツ (modern sports), 土地所有者 (land owners), 土地台帳 (cadasters), 諏訪湖 (Lake Suwa)

- | | |
|--|--|
| <p>I はじめに</p> <p>1) 目的と方法</p> <p>2) 対象地域の概観</p> <p>II 製糸業の勃興と新しい土地所有者</p> <p>1) 伝統的な湖畔利用と水田開発</p> <p>2) 製糸業の勃興と新たな土地所有者</p> <p>III 近代スポーツの流入と温泉観光地の成立</p> <p>1) 中央本線開通と温泉入浴場の開設</p> <p>2) 近代スポーツの流入</p> <p>①冬季のスポーツ</p> <p>②夏季のスポーツ</p> <p>3) 別荘と旅館の進出</p> <p>IV 観光の通年化と湖畔利用</p> <p>1) 観光の通年化と客層</p> | <p>2) スポーツによる湖畔利用の地域分化</p> <p>V むすび</p> <p>I はじめに</p> <p>1) 目的と方法</p> <p>地理学の中でも、古文書や絵図などの歴史資料をもとに景観を復元し、地域の成り立ちを解明するような研究手法は歴史地理学的手法と呼ばれる。観光地の研究にも、特に近世から近代を対象に、こうした手法がみられる。例えば山村(1969)は、伊香保温泉において老舗旅館が蔵する史料をもとに、少数の世襲地主が温泉利用権の支配を通じて、小旅館や土産物店などを従えながら温泉地</p> |
|--|--|

*立教大学観光学部・准教授

の封建的システムを形成し、近代以降もそのシステムを引き継いでいることを解明した。

近代には、新たな観光に結びつく様々な習慣やレクリエーションが西洋から日本に流入したが、小口（1985）は、明治初期における海水浴の受容過程について、絵図や医学書などをもとに、海水に身を浸す行為が医療行為としての海水温浴を糸口に普及したことを解明した。また、佐藤・斎藤（2004）は、軽井沢において土地台帳と地籍図をもとに明治・大正期の土地所有と土地利用を復元することで、別荘所有者が第一次大戦を契機に欧米人から日本人へ遷移していったことを解明した。さらに、神田（2001；2003）は、西洋と東洋という心象地理が帝国主義時代の欧米人のアイデンティティ形成に強く関係しているのと同様に、南洋という心象地理が近代日本の帝国主義拡大や観光空間形成にも影響したことを、新聞やガイドブックなどの諸記録を駆使して突き止めた。

本稿で取り上げる諏訪盆地も、古来から知られる温泉地であると共に、近代には製糸業やバルブ工業など日本を代表する工業が次々に開花し、様々なレクリエーションが流入して、それらが観光地化に結びついた地域である。わけても上諏訪においては、スケートやボートなどの近代スポーツの流入が地域を一変させた。本研究は、明治期から昭和初期にかけて上諏訪で新たに生まれた観光地が、工業やレクリエーションの近代化に関連していかに形成されたのかを解明する。

スケートやボートのような水辺のスポーツの隆盛に伴う観光地化の研究には、沿岸域特有の歴史地理学的手法が欠かせない。佐野（2003）は、琵琶湖の内湖の沿岸域を事例に、豪農に残された村方文書・絵図、県庁に残された公有水面埋立申請書や漁業免許などから近世以降の景観を復元し、内湖の地形や生態に応じて築かれた住民の環境利用システムが近代化とともに崩壊するプロセスを明らかにした。すなわち、昭和初期の水位低下に伴う生物資源の減少、農業または漁業の専門化を背景に、沿岸域では漁労・藻取り・葦刈りなどが減り、農地として干拓されていった。このように、近代における沿岸域の利用変化には、地域の自然環境や産業構造、生業システムなどの複合的な要因

が折り重なっている。そこで本研究では、自然環境や、漁業や工業などの諸産業などとの関わりとそれらの変化の分析を通じて景観を復元していく。

本研究では、景観復元のための一次資料として、法務局の土地台帳と公図を用いる。これにより、絵図や史料を用いるよりも、土地所有者と土地利用を正確に再現できる。また、それらを研究に必要な年次で切り取って地図化し、分析することも可能となる。

土地所有と土地利用、およびそれらの経年変化の分析には、GISを用いた。具体的には、地番ごとに土地所有者と地目、それらの変化年を抽出し、データの欠落を補いながら、売買や相続による分筆や合筆を反映させた。それらの地理行列を、公図をもとにした地図データに結合させ、地理情報データベースを作成した。そして、土地所有者を基準に土地をディソルブ処理させた地図レイヤーと、地目を基準に土地をディソルブ処理させた地図レイヤーを重ね合わせ、土地所有者ごとの地目を示す地図を作製した。これによって、年次ごとの詳細な土地所有者と土地利用の地図を復元できる。

2) 対象地域の概観

諏訪盆地はフォッサマグナと中央構造線が交差するところであり、上諏訪の温泉も北西から南東方向に走る断層線に沿って湧出している（吉村・三澤、1931）。また、諏訪盆地は中山道と甲州街道が交わる交通の要衝でもあり、上諏訪はこの地域を統治する高島藩の城下町として栄えた。城下町の北口にあたる湯の脇地区をはじめ、内湯のある旅籠も多くあったが、昭和初期までに湖畔に移転したり廃業したりした。観光地化の契機は1905年の中央本線開通であり、温泉旅館や飲食店などが上諏訪駅から湖畔へかけて進出した（諏訪市史編纂委員会、1976：742-743）。

諏訪湖は八ヶ岳や南アルプス北端部を集水域に持ち、豪雨や干ばつといった流入量の増減により、その水位は大きく変動した。洪水に対処するため、天竜川への流出部の開削と浚渫が16世紀末以降行われたものの（諏訪市史編纂委員会、1976：231-246）、周囲の沖積低地は湖水位の上

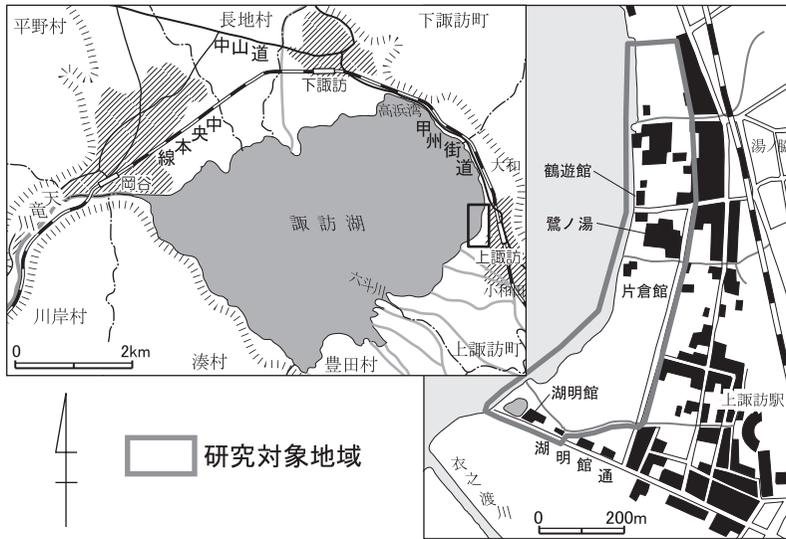


図1 諏訪湖と研究対象地域 (1931年)

(陸地測量部発行1/2万5千地形図および三澤 (1931) より作成)

下によって陸地となったり湖底となったりする地域が多く、そのような地域はとくに湖の東南部に広がっていた。研究対象である中浜地区と湖柳地区もその一部である (図1)。

標高759mの内陸高地に位置する諏訪湖は、冬季には晴天率が高く放射冷却があり、水深も最深部で8mと浅いことから、1月から2月にかけて湖面が結氷する。結氷した湖面には、お御渡りと呼ばれる水の亀裂と堤がみられる。積雪も少ないことから、明治末からスケートが発達した。

湖上では、古来より諏訪大社の神官らによって弓矢の水上射礼が年中行事の一つとして行われていたとされる。これは見物する住民も交えた納涼の舟遊びであったろう。しかし、江戸期にはいと、高島城の防衛の理由で農漁舟以外の約4.5m以上の船舶の使用は禁じられた。そのため、余暇に用いられる船は、藩主や家老の御座船のみであった。その後、1894年になってようやく下諏訪で屋形船が始められることとなる (田中, 1918: 1338)。

II 製糸業の勃興と新しい土地所有者

1) 伝統的な湖畔利用と水田開発

諏訪湖の南東部には湖への流入河川が多く、その河口付近には低湿地が広がり、湖岸には葦やマコモなどの水生植物が繁っていた。低湿地には排水路が掘られるとともに、高い栄養分を含む湖底の堆積物を汲み上げて埋立てが進められた。このようにして干拓されて耕作可能となった水田では、田舟に乗ったまま田植えや稲刈りが行われたところもあった。田舟は排水路と湖水を使って移動していた (湖柳町区史編纂委員会, 1988: 126)。

対象地域において低湿地を干拓し、水田を創出したのは、主として隣接する大和地区と角間地区の農家であったという¹⁾。これらの地区はいずれも甲州街道に沿った集落であり、上諏訪宿にも隣接しているため、農業の他に商業などを組み合わせていたものと考えられる。

また、上諏訪の高島藩士だった南沢地区の金子庄次が家禄奉還として、高島藩から湖柳地区の低湿地を払い下げられた例もある (湖柳町区史編纂委員会, 1988: 42)。この土地は1898年に登記され、土地台帳には水田と記されている。そのため、

本人か小作人が耕作していたものであろう。この土地には後に、子息の金子兵助が湖明館という貸席を開設することになる。このように対象地域は、干拓が進む低湿地で住居や商店などの建物は存在せず、周辺集落からの出作り地であった。

また、諏訪湖北岸には北西から南東に糸魚川・静岡構造線の断層が走っており、この断層上に温泉の湧出地帯がある（吉村・三澤，1931：247）。対象地域でも温泉が自然湧出するところが多く、農民が掘って小屋を建てて農作業後に入浴したり、水田に温泉水を引いて肥料に用いたりしていた。

湖岸に対して直角に掘られた排水路は、湖畔水田の地盤を嵩上げするため、湖底を浚渫した泥土を船で運搬した水路でもある（田中，1918：1367）。水路にはマコモや葦が繁り、水田と農家の間を農作物や糞尿を運ぶ舟が往来した。また冬季には、湖水を砕いて石積みの周りに漁網を仕掛けるヤツカ漁や、カモ猟が行われた。

2) 製糸業の勃興と新たな土地所有者

諏訪湖畔の製糸業は、1872年に明治新政府の政商である小野組と地元の醸造業である土橋半蔵が折半出資でイタリア式器械を導入し、上諏訪の角間川沿いの深山田に製糸場を創業したことに始まる。この製糸場は1874年には閉鎖されたが、上諏訪ではここから器械を買い取って創業するものや、岡谷では女工に技術指導を受けさせるものなどがあり、器械製糸業は諏訪地域で急速に広まった。

伊東勝太郎も製糸業に乗り出した一人である²⁾。彼は対象地域に土地を有しており、その主要な部分は、1897年と翌年にかけて地目が水田として登記されたことから、それ以前に大和地区の区長を務めていた父親・伊東政義が干拓したものであることが分かる。勝太郎は1905年に、この土地に鷺ノ湯を創業することとなる。

図2は1900年の土地利用と土地所有を示したものである。これによると湖岸付近では原野や沼沢地が多く、内陸部では水田が広い面積を占めている。これは、この地域が湖へ向かって干拓されてきたことを示している。土地台帳をみても、湖

岸に近い茅野平治と小口留三郎、片倉兼太郎、長崎九兵衛、茅野市之助および金子兵助の土地は、いずれも1878年に歛下年期³⁾と記されており、20年後に年期が明けて水田として再登記されている。

土地所有者の中で前述の大和地区と角間地区の住民として判明したのは、伊東政義の他に、茅野平治、土橋源造、宮沢直助、渡辺繁吉である。このうち茅野平治は湯ノ脇地区にかけての地主であり、医者でもあった（吉村・三澤，1931：260）。また、土橋源造の父・善造は醸造業の傍ら、前出の土橋半蔵と組んで製糸器械も扱っており、宮沢直助は岡谷の大製糸家である林国蔵の実兄であった（諏訪市史編纂委員会，1976：83，934）。製糸

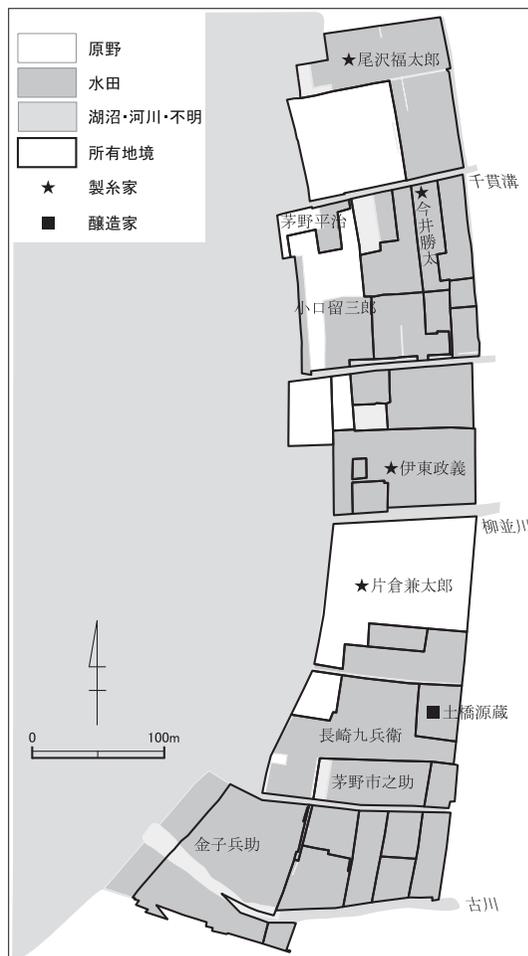


図2 諏訪湖畔の土地利用と所有者（1900年）
（土地台帳による）

業に乗り出していた者としては、渡辺繁吉と丸茂米作があり⁴⁾、今井勝太も長地村萩倉の大きな養蚕家であった⁵⁾。したがって、対象地域を干拓したのは、大和地区と角間地区を主とした有力地主・有力事業家であり、その多くは製糸家であった。

製糸家たちは農家による家内制機械工業として製糸業を始めたが、明治初期に繭の共同購入や製造工程の一部共同化などによって合理化を図るため、結社を組織した。たとえば、川岸村の片倉兼太郎は平野村の尾沢金左衛門とともに両村の製糸家を募って1879年に開明社を結成した。川岸村と平野村では、天竜川に水車を設けることで容易に用水と動力を得ることができたため、生産性が高かった（岡谷蚕糸博物館、1976：22-24）。そのため、開明社は繰糸器を311釜から1897年には2074釜まで増やし、1907年に解散するまで生糸生産を飛躍的にのばした（江波戸、1957：61）。

その後、片倉兼太郎を当主とする同族組織の片倉組が1894年に製糸工場を作ったのを手始めに、有力製糸家は結社から独立して大規模経営を手がけるようになった。

上記の尾沢金左衛門の子息である尾沢福太郎と琢郎が対象地域に土地を取得したのは、1899年のことである。この頃には、すでに中央東線の延伸と上諏訪駅の建設が計画されていたことから、土地購入には工場用地としての実質的な利用や、地価の値上がりを期待する投機的な意図を持っていたと考えられる。しかし、中央東線の延伸工事が富士見まででストップしたため、1904年には片倉兼太郎を中心とする岡谷と川岸の製糸家が、中央線鉄道速成同盟会を結成し、尾沢琢郎や今井五介などの平野村・川岸村の製糸家と上諏訪町の有志が45万円の政府公債を購入することで、中央東線延長の工事を実施するよう政府に請願した（諏訪市史編纂委員会、1976：452-453）。

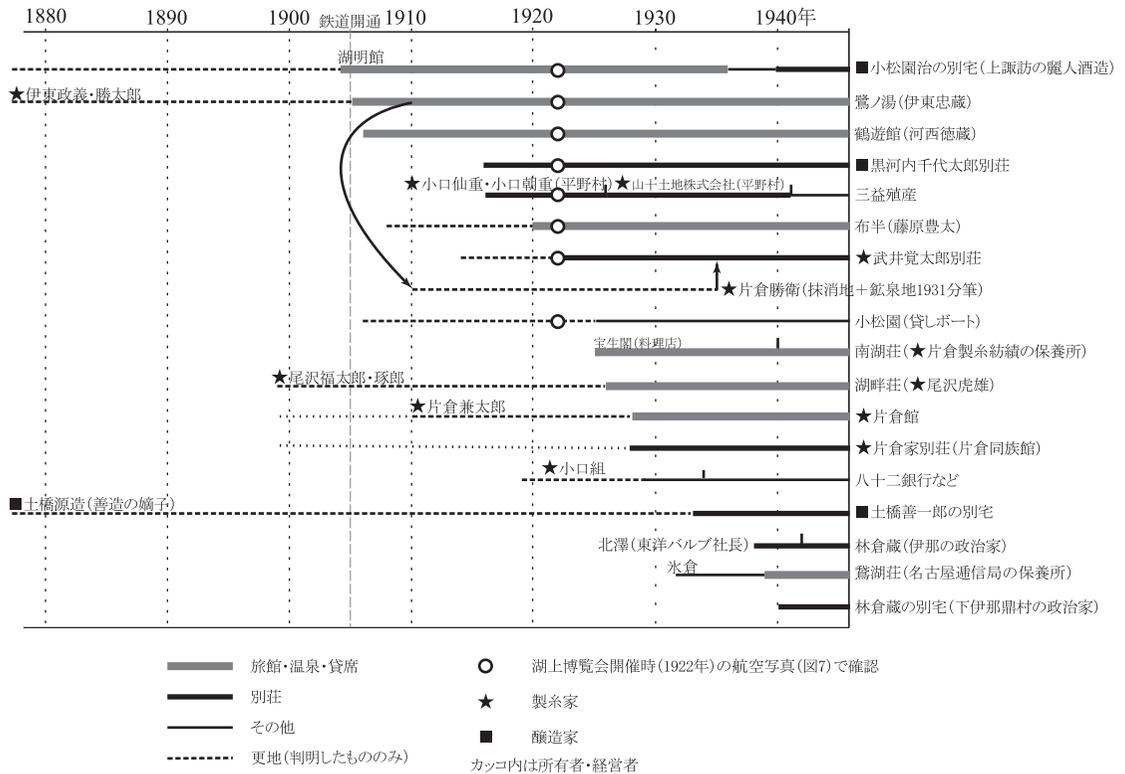


図3 上諏訪の諏訪湖畔における観光施設の土地所有と開設
(土地台帳、聞き取り、南信日日新聞記事による)

対象地域における片倉兼太郎の土地取得年は判然としませんが、上記のような経緯から、尾沢福太郎・琢郎と同様に鉄道開通前後と考えるのが妥当であろう⁶⁾。尾沢福太郎と片倉兼太郎は岡谷の製糸工場から排出された石炭の燃え殻を船で運び、対象地域の低湿地を埋め立て、土地を造成したという。なお、上諏訪駅構内の柳並川には船の係留場があり、上諏訪駅と岡谷方面を結んで石炭や薪炭、米などが運搬されていた(湖柳町区史編纂委員会編, 1988: 20, 250)。以上のことから、地主・商家といった湖畔の有力者たちは明治初期に製糸業とその関連産業に乗り出したと同じように、中央本線の開通を見越して対象地域で土地開発に乗り出していたと言えよう。

Ⅲ 近代スポーツの流入と温泉観光地の成立

1) 中央本線開通と温泉入浴場の開設

甲武鉄道および官設鉄道(後の中央本線)が御茶ノ水や新宿から上諏訪を通して岡谷まで延伸されたのは1905年のことである。鉄道開通と前後して、湖明館(貸席)と鷺ノ湯(温泉入浴場)および鶴遊館(貸席・温泉入浴場)がそれぞれ1904年と1905年、1907年に対象地域に相次いで建てられた(図3)。これらはいずれも上諏訪駅側に正面玄関を持っており、鉄道開通に伴う客足の増加を期待したものであろう。

図4は、1910年の土地利用と土地所有者を示したものである。これによると、依然として水田や原野が大半を占めているが、上記の3施設が新たに湖岸に立地している。湖明館と鷺ノ湯の所有者は、すでに父親が所有していた土地に開業したものであり、前者は前述の金子兵助が士族授産の土地を活用したもの、後者は伊東勝太郎が大和地区で始めた製糸場の失敗を取り戻そうとしたものである⁷⁾。彼らは社会から淘汰されたものが再起を図ったと言えよう。鶴遊館の所有者は小和田地区の旅館亀屋⁸⁾の河西徳蔵であり、甲州街道沿いの旧旅籠・旅館が湖畔へ進出する先駆けであった。

貸席を経営の支柱としていた湖明館は、池を配した広い日本庭園を造作して、その中に六角堂や

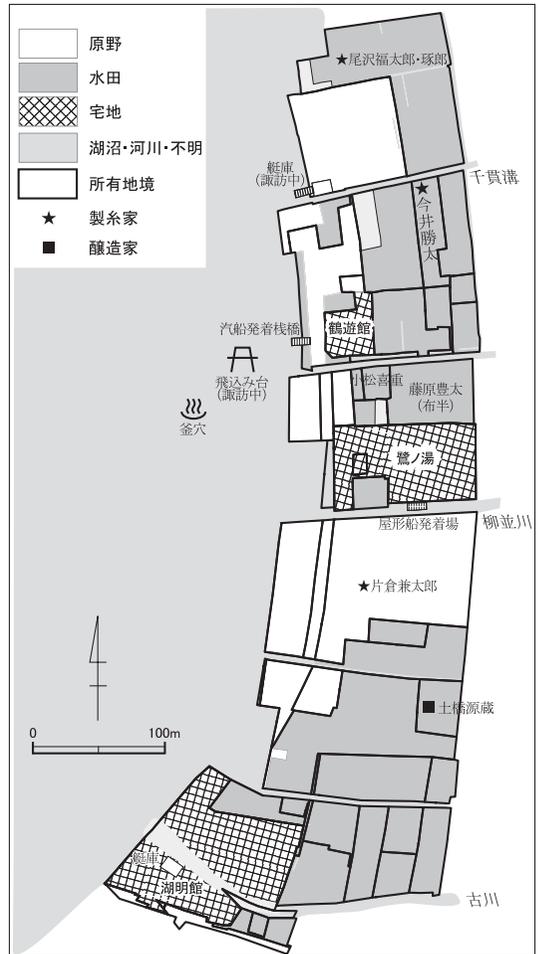


図4 諏訪湖畔の土地利用と所有者(1910年)
(土地台帳, 1922年空中写真, 田中阿歌磨(1918)などによる)
※水辺施設は1910年代に存在したもの。
諏訪中艇庫は1905年、飛び込み台は1912年、湖明館艇庫は1918年、鷺ノ湯棧橋は1923年から設置。

茶室、茅葺きの邸宅、東屋を配して渡り廊下で結び、集客の呼び物とした⁹⁾。また、鷺ノ湯は水田から湧出する温泉を利用して、「一銭銭湯」との呼称で開業した入浴場である。住民向けには古くから共同湯が存在したことから、鷺ノ湯は住民よりむしろ鉄道の乗客を目当てに開業したものである。鷺ノ湯は当時としては珍しいコンクリート風呂や露天風呂を作って、呼び物とした。鶴遊館も湖を見渡せる露天風呂と貸席を合わせて営業していた。

これらの入浴施設・貸席の共通点は、温泉入浴

施設を備えている点と湖岸に立地している点である。温泉入浴施設は、庭園越しに見える諏訪湖を借景に用いたものである。また、湖岸に近いために駅までの既成の通路がなく、各施設が自ら畦道を広げたり水路を埋め立てたりして道路を造成した。幅2mの湖明館通りや、鶴遊館に通じる幅7mのポプラ並木がそれである。以上のように、1905年の鉄道開通を前後して建てられたのは、温泉に貸席を組み合わせたものであり、温泉入浴やお座敷での宴会などが行われた。このようにしてできた湖畔の貸席を下地に、近代スポーツが導入されることとなる。

2) 近代スポーツの流入

①冬季のスポーツ

中央東線の開通を機に、上諏訪にはスケートや湖水浴、ボートなどの西洋起源のレクリエーションが到来し、観光客の流入と観光地の発展に繋がっていく。

冬季のスポーツとして諏訪湖で特筆すべきはスケートである。スケートは居留地外国人や一部の日本人によって横浜や東京近郊の水田や製氷場、箱根芦之湯の精進池などで行われていた(山本・棚田, 1977: 320-323)。諏訪湖におけるスケートの嚆矢は札幌から転校してきた諏訪中学校生徒によって1903年に始められたことにある。翌年、山本嘉市が諏訪中学校に体育教師として赴任し、冬季の体育にスケートを取り入れた。さらに、安価な下駄スケートが1906年に発明されると、高等教育機関だけでなく、諏訪湖畔の小学校や青年会、自治団体主催の様々なスケート大会が開かれるなど(三澤, 1926b: 460)、スケートは湖畔住民に広く普及していった。

1907年には鶴遊館沖と高浜湾にアーケ灯が設置されて夜間もスケートが可能になり、新聞紙上での広告もあって、欧米の外交官や大学生などが東京から訪れるようになった(諏訪教育会, 1986)。山本嘉市も「外国人の来遊が技術を進歩せしめた事が一通りでない」と記している(山本, 1911: 205)。1909年には諏訪中学校氷滑部が創部され、スピードスケート競技の先駆けとなる諏訪湖一周氷滑大会が1906年から1916年まで毎年

開催された。その後も、東京帝大や早稲田、慶応、北海道大、東北大、二高、松本高、日本歯科などの学生連合スケート大会が上諏訪で開かれるなど、諏訪湖は日本におけるスケートの中心地となっていた(三澤, 1926b: 459-460)。

その後、1914年にはアイスホッケーやアイスヨットなども試みられた(田中, 1918: 1602)。なお、鷺ノ湯の伊東忠蔵は全国中等学校氷上大会のリレー競技で1923年から4年連続優勝し、1925年にはアイスホッケーチームを創設している(諏訪清陵高等学校同窓会, 1981)。

スケート客が増加したことで、鷺ノ湯は1911年に温泉旅館へと業態を変え、1914年には客室を増築した。スケート客には長期滞在する者が多かったため、スケートのシーズンが一年で最も宿泊客が多かったという¹⁰⁾。また、鶴遊館が小和田から移転してきた1907年はスケートの隆盛と一致していることから、スケート客を目当ての一つに移転してきたものと推測される。このように、旅館の開設・増築にはスケートの影響がきわめて大きかった。

②夏季のスポーツ

夏季のスポーツとしては、湖水浴とボート(端艇)があげられる。湖水浴は海水浴と同様、保健思想の導入とともに学校教育に取り入れられ、学校主導で明治末期から普及したものである。諏訪湖でも湖水浴場が1905年に上諏訪の衣ノ渡川と中門川の間の湖岸に開設され、その後も霞崎や高浜などに開設された(諏訪市体育連盟, 1980)。このことは、琵琶湖や浜名湖、霞ヶ浦などでも湖水浴場が開設され、鉄道の延伸とともに都市住民が訪れたことと符合している。諏訪湖には海から遠い甲府や松本などからも湖水浴客が訪れたと考えられる。

また、1890年代には師範学校や旧制中学校の間でボートの対校レガッタが盛んに行われるようになった。諏訪中学校でも1900年に学友会で端艇購入運動があり、1901年に衣ノ渡川の2隻の貸しボートを借りて、端艇部が創部された(諏訪清陵高等学校同窓会, 1981: 337-339)。同年には、学友会の第一回端艇大会が開かれ、1905年

には借りていた2隻を買い入れ、湖畔の県有地に艇庫を建てた。1911年には諏訪中学校漕艇部が新たに2隻を買い足し、諏訪中学校生の誰もがこのボートに乗ることができ、校内レースも盛んであった。

また、1904年には上諏訪駅敷地内の柳並川に、里見ボート屋が6隻ほどのボートと4隻ほどの和船で貸しボート業を開業した(湖柳町区史編纂委員会, 1988: 134)。これも前述の温泉入浴施設・貸席と同様に、鉄道開通を見越しての開業であろう。また、1904年に聖公会のオードレー主教が趣味のボートを駆るために岡谷市湊(小田井)の山腹に別荘を建て、避暑に来るたびに集会や講演会を開いた(諏訪教育会, 1986: 425)。

湖明館でも、1918年には貸しボートが10隻ほどあった。鶴遊館でも1923年には貸しボート3隻ほどを導入した。さらに、昭和に入ると、小松園では小型モーターボートを3隻ほど導入し、加えて寺島園ボートやノンキボートが湖柳町に開業した。このように諏訪中学校のボート活動に触発されて、貸しボートや小型モーターボートが増えていった。

さらに、諏訪巡航汽船が1910年に設立され、汽船2隻が大阪から搬入された。鶴遊館の河西徳蔵も諏訪湖汽船を設立して汽船・高島丸を東京から搬入し、鶴遊館を起点に高浜と岡谷を結ぶ定期航路を1912年に始めた。乗合馬車よりも短時間で往来できたため、住民の移動手段として、また観光客にも盛況だった(湖柳町区史編纂委員会, 1988: 134)。前者は湯の脇溝渠の河口に発着場を新設し、鶴遊館前の栈橋を発着場とする後者と競争したが、1913年に廃業した。諏訪湖汽船の定期航路はバス交通が発達した1930年まで運航された。また、1923年には鷺ノ湯の伊東勝太郎と河西啓作が共同で、10人乗り屋形船2隻を営業し始めた。

3) 別荘と旅館の進出

前述のように、当初対象地域で温泉入浴施設を開業したのは、副業的に製糸業や旅館業を営む上諏訪の地主層であった。彼らは小規模であったり甲州街道の人の往来が少なくなったりして家業に

新たな活路を求めたものである。

1910年代半ば以降、平野村や川岸村など岡谷の大資本製糸家や、高遠の酒造家が対象地域で別荘を建てるようになった。上諏訪の湖畔に最初に別荘が建てられたのは1916年であり、高遠町で酒造業・黒松仙醸を営んでいた黒河内千代太郎によると言われている。続いて、平野村の製糸家である小口仙重¹¹⁾が別荘を建て、1920年頃までには武井覚太郎¹²⁾も別荘を構えたことが確認される¹³⁾。

武井覚太郎は辰野町の製糸家で、片倉家から養子を迎えて片倉組の片倉製糸紡績(1920年設立)の常務をつとめた。片倉家当主の片倉兼太郎も、片倉同族館と呼ばれた別荘を対象地域に建てており、これは図7の1922年の航空写真からも確認できる。景気拡大で大資本家の資金が潤沢となったのであろう。彼らは前述のように鉄道開通を見越して対象地域に土地を投機的に所有していた。しかし、製糸工場などの生産施設を建設せず別荘を建てたのは、対象地域が上諏訪駅に近接しており交通利便性が良かったこと、工業都市の岡谷に比べて空気が綺麗で、しかも温泉や遊郭、スケートなどがあり、賑わいがあったことがあげられる。

さらに、1930年代に入ると、上諏訪の醸造家やバルブ工業家なども別荘を建てた。1933年には諏訪を拠点とする亀源醸造の土橋善一郎が、1940年には麗人酒造の小松園治が別荘を建てた。他にも、東洋バルブ社長の北澤が1938年に、鼎村の素封家である林倉蔵が1940年に別荘を建てている。これらのことは、諏訪湖周辺の資本家が蓄えた余力を投じたものだが、製糸業が主導してきた諏訪地域の経済発展が上諏訪の醸造家にも波及していたこと、諏訪地域の産業が機械工業へ遷移しつつあったことが伺える。

図5は、1931年の土地利用と土地所有者を示したものである。対象地域の南部を中心に別荘を含む宅地が増加していることが分かる。これらの水田から宅地への転用は、天竜川に掛けられた製糸用水車の撤去と共に、1914年に大規模な浚渫も実施され、湖水位が33cm下がったことが下地となった(諏訪市史編纂委員会, 1976:

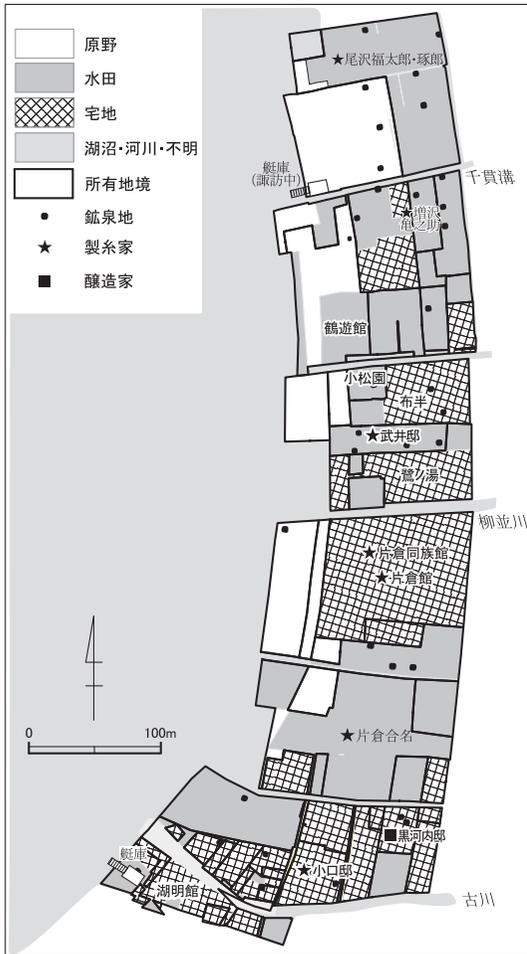


図5 諏訪湖畔の土地利用と所有者 (1931年)
(土地台帳, 聞き取り等による)

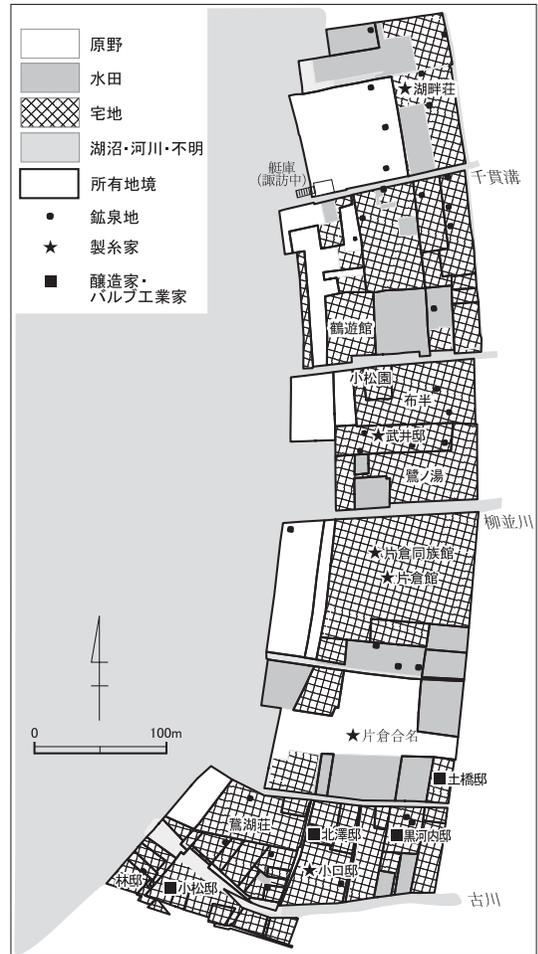


図6 諏訪湖畔の土地利用と所有者 (1940年)
(土地台帳, 聞き取り等による)

231-246). そして, 上諏訪駅の機関区から天秤棒で担いで対象地域に運ばれていた水道が1924年に敷設されたため, 旅館や別荘, 料亭などの観光施設が増えた(湖柳町区史編纂委員会, 1988: 93-94). このような宅地の増加は, 1940年の土地利用と土地所有者を示した図6をみても, 1930年代に加速度的に進行したことが分かる.

また図5では, 鉱泉地が新たに加わっていることが分かる. これらの鉱泉地は, いずれも1931年に地目変更されたものである. この直接の原因は, 同年4月の地租法施行に伴う税務署の働きかけであるが, これについてはIV章の2節で後述する.

1920年以降, 対象地域には旅館も増えている. 1920年には布半別荘(旅館)が, 1922年には隣接地区ではあるが油屋別荘といった旅館が開設された. これらの旅館は名称に「別荘」や「別館」が付いていることから分かるように, 甲州街道の上諏訪宿に本店があり, そこから湖畔に支店を開設したものである. また, 対象地域に隣接した地区にも, 貸席・紅葉(1914年), 菊屋旅館と湖柳館がそれぞれ1932年と1935年に開設された. 加えて, 尾沢福太郎の養子・尾沢虎雄が1930年頃から湖畔荘を営業しており, 別荘を改築したものと考えられる¹⁴⁾. このようにして, 上諏訪湖畔に宿泊施設が増加した. なお, 第二次大戦後のこと

であるが、武井覚太郎の別荘は、上諏訪駅前の柳沢旅館の営業により、湖畔ホテルとして利用された例もある¹⁵⁾。

洋式5階建ての片倉館が建てられたのは1928年のことである。これは二代目の片倉兼太郎が主導して片倉同族が私財を投じた温泉入浴施設であり、女工への福利厚生を主要な目的にしており、仕事を終えた女工が岡谷から機船に乗って入浴しに来た。また、片倉館は地域住民への報恩・補償の意味合いもあったろう。というのは、天竜川に水車を設置していた製糸業者と、水害に悩まされていた湖畔低湿地の農民は利害対立していたからである。1913年には、水車撤廃の見返りに、製糸業者が湖畔9ヶ町村から補償金2万1,437円を受け取ってもいる（諏訪市史編纂委員会、1976：919-920）。

湖明館は1930年代半ばに廃館となったが、その隣接地には名古屋通信局が湖畔の水倉を買収して1939年に鷺湖荘を設けた。鷺湖荘は木造2階建て、定員30名の規模であった。片倉製糸紡績も1940年に料理屋を買収して保養所として片倉慰安所・南湖荘を設けた。

IV 観光の通年化と湖畔利用

1) 観光の通年化と客層

表1は、1919年と1925年および1936年の南信日日新聞から、上諏訪観光に関連する記事を抜き出したものである。

まず1919年の記事を見ると、スケートは1月初めから、2月上旬まで行われていた。中でも正月休みには、東京方面からスケート客が押し寄せていたことが分かる。1月下旬からは青年会や小中学校など地域住民によるスケート大会が行われていた。また、湖面の結氷と解氷に関する記事が連日のようにあり、スケート客や湖畔の旅館と住民にとって、湖面の結氷が一大関心事だったことが分かる。後述のように、湖面が結氷するまでは、スケート客は小学校の校庭や田んぼなどの簡易リンクで滑っていた。

1919年の2月中旬から7月中旬までの湖畔に関する記事は少ないが、4月29日の記事に「シー

ズンを迎え、湖明館は植栽、鶴遊館は棧橋と遊覧船、諏訪中は端艇の整備に取り組んでいる」とあることから、4月末以降は記事にするほどではなくともある程度の活動がみられたことが分かる。遊覧船やボートは4月末から7月までの期間においては中学生など一部の住民によるレクリエーションだったためだろう。

1919年の記事では、7月下旬以降、ボートや湖水浴など水辺の遊びを通じて涼を求める宿泊客は「避暑客」と呼ばれているが、軽井沢などと比べて滞在期間が短い点に特徴があった。8月31日には上諏訪の避暑客は169名という記事がある。また、北アルプスや八ヶ岳への登山の途中に上諏訪に滞在する宿泊客も多く、上諏訪は登山基地の一つであったことも分かる。このことは、上高地を拠点とした北アルプス登山が1910年前後から増加したことも符合している（佐藤・斎藤、2006：169-170）。

1925年には、1月18日の記事にあるように、フィギュアスケートやアイスホッケーも行われるようになっていた。この当時は日本スケート会が1920年に結成されて競技種目が充実し、見物も含めたスケート客が増えていた。また、1月9日と24日には、名古屋鉄道局主催のスケート団体客が臨時列車で到来した。1919年1月22日にも「中産階級が増えた」との記事があり、三澤（1926a：357）も「スケートファンの大部分は学生又は紳士の社会に属する」と記している。このことから、スケートの大衆化は下駄スケートの普及した諏訪湖畔の住民に限ったことであり、他地域から諏訪湖畔を訪れるスケート愛好者は依然として限られた社会階層だったことが分かる。1月末から2月にかけても、海軍水上飛行訓練や、陸軍松本連隊の湖上演習にも宿泊を伴う見物客が押し寄せている。7月いっぱいまで記事はないものの、8月16日と23日には、甲府から団体客500人が訪れている。ともに日曜日なので日帰りと考えられる。以上のように、1925年の上諏訪観光はスケートと湖畔納涼が中心であり、少ないものの臨時列車を仕立てて団体客が訪れる様は、マストリーズの嚆矢といえよう。

ここで、三澤勝衛が諏訪清涼高校三澤先生記念

表1 南信日日新聞記事よりみたと上諏訪観光に関する出来事

1919年		1925年		1936年			
1月	5	○ 諏訪湖の初滑り	5	○ 湖水凍らず、スケート客は藜の海へ	3	△ スキー客で省営バスが超満員	
	6	○ 湖水解けるも鶴遊館沖の結氷は厚い	9	○ スケート団体客が臨時列車で上諏訪へ、全面結氷	○ 諏訪観光協会、京浜の団体客向けパンフレット作成	△ 霧ヶ峰のスキー客、すでに1万名突破、驚異的増加	
		○ 京浜のスケート客が帰り支度	11	○ 積雪で湖水が堅固に	5	○ スケート客・スケート客の内訳	
		○ 高島小学校庭にスケート場	12	■ 全面結氷、鶴遊館沖で漁師がヤツカ上げ始める			
	10	○ 気温上昇するも鶴遊館沖の結氷は堅く安全	16	○ 鶴遊館沖で諏訪中のスケート大会			
	11	○ 湖水溶け、旅館に打撃	17	○ 衣之渡川沖で日本スケート会の氷上選手権競技			
	15	○ 湖面が一夜にして結氷	18	○ 日本スケート会のフィギュア、アイスホッケー、リレーの各選手権競技			
	22	○ 今年は暖気のためスケート道具商に打撃	○ スケート客が鶴遊館沖の釜穴に墜落	24	○ お御渡りで湖水隆起、横断スケートに注意呼びかけ		
		○ 旅館のスケート客は中産階級が増えた	25	○ 名古屋鉄道局主催のスケート団体客230名が来諏	27	△ 霧ヶ峰にスキーヤー千余名が殺到	
		28	○ 鶴遊館沖で中浜町青年会主催のスケート大会	29	■ 海軍氷上飛行で宿泊客が大挙来諏	28	△ スキー客の大半は東京から
	31	○ 鶴遊館沖の氷上グラウンドで諏訪中スケート大会				△ スキー客は前年比2倍半の激増	
2月	1	○ 鶴遊館沖で高島小のスケート大会	2	○ 諏訪連合青年会主催のスケート大会	2	△ 上諏訪駅下車のスキー客が1万名突破	
	3	■ 松本連隊の湖上演習	12	■ 松本連隊の湖上演習	9	△ 霧ヶ峰のスキー客2000名	
	9	○ 上諏訪町主催のスケート大会	15	■ 鉄道省の外国人客招致のための撮影隊が来諏	○ スケート客100名も今週末に上諏訪駅から降車		
3月					23	△ スキー客500名が東京より来諏	
					1	△ 霧ヶ峰のスキー客1万7千名突破	
4月					16	△ 霧ヶ峰はスキー当たり年、2万名突破目前に	
	29	× シーズンを迎え、湖明館は植栽、鶴遊館は桟橋と遊覧船、諏訪中は端艇の整備に取り組んでいる			23	△ 省営バス霧ヶ峰線利用のスキー客は延べ4万7千名に	
5月					5	△ 上諏訪駅下車の霧ヶ峰スキー客は今シーズン1万9千名突破	
					5	× 女工のボート転覆事故	
6月					25	■ 閑院宮の片倉貴賓館滞在、奉迎灯籠流し	
	11	■ 富士見高原にドイツ人神戸高商教師と貿易商が滞在			27	■ 上諏訪町観光課と観光協会が霧ヶ峰・車山・蓼科にハイキングコース設定	
7月					28	× 諏訪中のボートレース開催、艇庫沖から六斗川河口まで	
	9	■ 久瀬宮が北アルプスへ			30	■ 霧ヶ峰の湿原植物の鑑賞	
8月	21	■ 富士見高原の避暑			7	∞ 観光シーズン到来と修学旅行客の増加と片倉館への訪問	
	30	∞ 上諏訪避暑客の滞在期間は短い			×	ヨットの写真	
9月	31	■ 徳川頼貞が白馬登山の途中、上諏訪牡丹屋に投宿			■	霧ヶ峰農業生産組合が手工芸土産品の生産開始	
		∞ 上諏訪の避暑客51名(上諏訪駅調査)					
9月	10	∞ 上諏訪の避暑客90名(上諏訪駅調査)	16	∞ 甲府の遊覧団体500名が来諏	25	■ 霧ヶ峰で全国グライダー大会、40数団体が参加	
	26	× 蜂須賀正武が上諏訪牡丹屋に宿泊、船遊び、軽井沢へ		※ 諏訪湖横断水泳大会、鶴遊館から湖明館に観客1万人、小和田の漁船30隻が警戒担当	∞	高浜湾で湖上火火大会	
	31	∞ 上諏訪の避暑客169名(上諏訪駅調査)	23	∞ 甲府の遊覧団体500名が来諏			
	4	∞ 上諏訪駅の旅客は暑中休暇が終わりに近づき激減					
		■ 御嶽山の登山者が2万6873名に					

○スケート
△スキー

×ボート・船遊び
※湖水浴
∞湖畔納涼

■関連事項

文庫に残した油屋別館の1925年の宿泊客に関する調査記録をみてみよう。ちなみに、三澤は諏訪中学校（現諏訪清陵高校）の教員でありながら、諏訪地域の卓越風や太陽黒点などの論文を学術誌に発表した在野の地理学者であった。油屋別館の宿泊客は、1月（293名）、2月（197名）にある程度集中しており、スケート客を多く受け入れていた。3月から6月にかけてはそれぞれ133名、157名、163名、133名で150名前後と比較的少なく、上諏訪においては11月（139名）と12月（127名）と合わせて閑散期であった。とはいえある程度の宿泊客があるのは上諏訪駅に近接するためだろう。7月（221名）と8月（304名）は1年でも最多客期となっていた。このように、1925年当時の上諏訪観光は冬季のスケートと夏季の納涼の2つの多客期があった。

また表2は、三澤勝衛が調べ上記記念文庫に残した1924年12月末から1925年2月にかけての布半別荘（旅館）の集客圏である。これによると、1月1日から1月10日までの正月休みに東京から88名、名古屋から38名、大阪と兵庫からそれぞれ33名と39名が宿泊していた。これらは表1の1919年1月6日の記事にあるように、諏訪湖で初滑りを楽しんだスケート客であり、年次は異

なるものの1月6日に帰り支度をするまで1週間近く滞在していたことになる。その後も2月10日までスケート客は訪れており、特に1月中旬からは長野や岐阜といった近隣からの来訪が多数を占めている。最多客期で高価な正月を避けて近隣のスケート愛好者が集まったのだろう。

1936年には、霧ヶ峰のスキーに関連する記事の増加が注目される（表1）。霧ヶ峰へのスキー客の多くは上諏訪を基地にしていた。スキーは4月5日に至るまで4ヶ月間も継続しており、2月上旬までだったスケートに比べて2ヶ月分、上諏訪観光の長期化に貢献している。スケートに関する記事は少ないが、スケート客は減少したわけではなく、恒例となってきたことから、記事としての価値が相対的に薄らいだのだろう。また、注目すべき点は、5月と6月にも記事が増えた点である。この当時には霧ヶ峰や蓼科でのハイキング客や片倉館への修学旅行客が増加していたためである。以上のように、上諏訪が冬季と夏季のスポーツや納涼もできる温泉観光地として定着したこと、周辺観光地への拠点としての機能も含めた多客期の延長努力もあって、上諏訪観光は通年化しつつあったと言える。

表2 布半別荘の府県別宿泊客数の推移（1924年12月末～1925年2月初旬）

	1924年	1925年				計
	12月 25～31日	1月 1～10日	11～20日	21～31日	2月 1～10日	
茨城	13	3				16
千葉			2			2
東京		88	26	18	59	191
神奈川	20	9		2	2	33
山梨		15	3		10	28
長野		6	36	65	5	112
岐阜				81	48	129
愛知	5	38		29	4	76
京都		4	5			9
大阪		33				33
兵庫	16	39				55
その他	27	57	27	73	69	253
計	81	292	99	268	197	937

※資料には、「スケート客はこのうちの63.4%」の注意書きあり（三澤先生記念文庫の資料による）

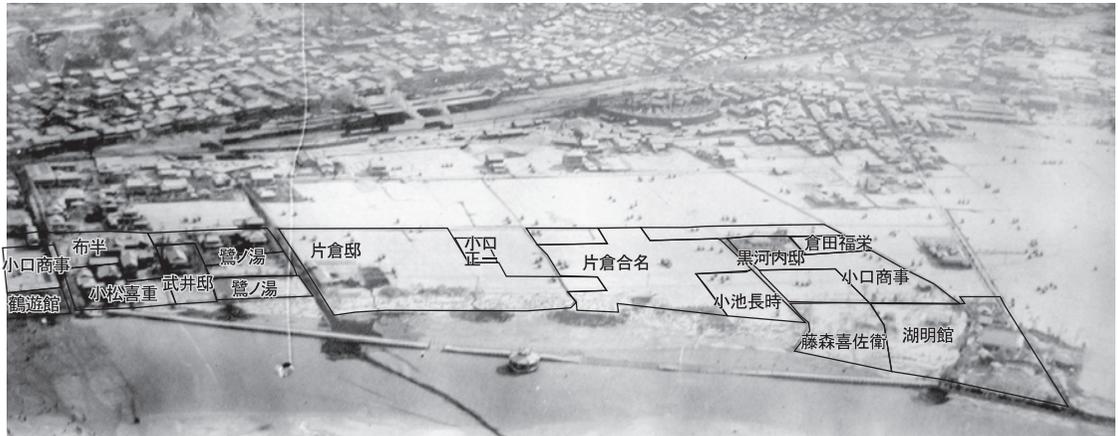


図7 対象地域の航空写真と土地所有者（1922年）
 （諏訪清涼高校三澤先生記念文庫蔵、所有地境と所有者は筆者加筆）

2) スポーツによる湖畔利用の地域分化

図7は、1922年に開催された、諏訪湖上博覧会の際の航空写真である。これは湖明館から鶴遊館までの湖畔に、上野不忍池で開かれた平和祈念博覧会の建物を移築して開催されたもので、湖上に幅3.6m、長さ540mの橋をかけ、美術館や蚕糸館、農業館などの展示館が設けられた。湖面は結氷しており、鶴遊館沖は温泉湧出により一部解氷している。鷺ノ湯や湖明館などいくつかの建物の他は水田が広がっている様子が分かる。また、鷺ノ湯から湖明館までの湖岸には葦群落が繁茂していることが見て取れる。

結氷した諏訪湖において、とくに雪が積もる前の不純物がなく滑らかな状態は「油氷」と呼ばれ、水田に水を張って作られた手入れの悪いリンクに比べると、スケート靴のエッジがよく効いてスケート愛好者に珍重された。1922年に東京から訪れたスケート客の記録では、1月7日に「リンクでフィギュアの練習、アイスホッケー遊戯に余念なかったスケーターは（筆者注：湖面が）凍ったと云う声と共に雀の如く嬉々として出掛けた」。彼らはその翌日には高浜湾から上諏訪沖へ滑走し、上陸して湖畔の旅館の温泉に入って疲れを癒やした¹⁶⁾。このように、スケートは旅館にとっては施設に手を加えず営業できる点がよく、スケート客にとっては温泉との組合せがよかった。

諏訪湖が結氷し、スケートにも安全な氷厚となるのは1月下旬から2月上旬までの約20日間とされた（田中、1918：1601-1602）。これ以外の期間は湖上でのスケートは危険なので、山陰や木陰にある水田を結氷させてリンクを作り、そのリンクでは12月中旬から3月まで滑走が可能であった。1926年の記録には、上諏訪駅の東北に上諏訪特設リンクが、高島城のお濠に城趾スケートリンクが諏訪湖結氷までの予備的リンクとして設けられており（三澤、1926b：455）、スケートシーズンの延長の努力が払われていた。

中でも、スケートの拠点となったのは鶴遊館であり、その沖合がスケート場となった。鶴遊館沖では1909年に諏訪中学校が全校生徒参加のスケート大会を開き（諏訪清涼高校同窓会、1981：344）、1918年には主要な2カ所のスケート場として高浜湾と共にあげられている（田中、1918：1602）。鶴遊館沖がスケート場として活気のある湖面となった理由には、鶴遊館の経営者である河西徳蔵が湖面に二段六畝の権利を所有していたことがあげられる¹⁷⁾。このように、湖面と陸地の遷移地帯に所有権を有していたことが、漁業者や湖水の採水業者との競争を避けて、湖面へのアプローチや棧橋を設けられ、レクリエーションの拠点形成に繋がったと言える。

しかし、鶴遊館沖には温泉の湧出する「釜穴」と呼ばれる水域があり、結氷が緩みやすい箇所であ

もあった(図7)。スケート選手権大会などが開かれると、観客が落ちないように釜穴の周囲に警官が立ち、看護婦も控えていたという¹⁸⁾。それでもなお鶴遊館が拠点となった点に、湖面にも張り出した土地所有権の存在の大きさが伺える。なお、1925年1月12日の記事にあるように、湖上でのスケートには、ヤツカ漁の操業が十分な水厚の指標となっている点が興味深い。

鶴遊館の地先は、スケートに加え、湖水浴客も諏訪湖で最も多かった(田中、1918:1595-1596)。これは、上記の土地所有権に合わせて、流入河川がないため水質はさほど綺麗ではなかったものの、上諏訪駅から近く交通の便が良かったためである。また、諏訪中学校の遊泳氷滑部が1912年に飛び込み台を作って水泳の練習をし始めたことも(諏訪清陵高校同窓会、1981:355-356)、湖水浴場の活況を促したであろう。そして1913年以降、諏訪中学校では夏休みの水泳練習の締めくくりとして、鶴遊館沖から天竜川まで諏訪湖横断遠泳が実施されるようになった。湖中では藻が繁殖し、恐れを抱きながら泳いで横断していたという。

また鶴鳴館の北側の県有地には、諏訪中学校の艇庫が建てられた。諏訪中学校は、鶴遊館を主会場に、その沖合をレース場としてボートレースを実施していた(諏訪清陵高校同窓会、1981:339)¹⁹⁾。鶴遊館の1階は選手の支度部屋に、2階は職員の展望台に用いられ、前庭から岸辺一帯に生徒の応援団が群がり、紅白ストライプのユニフォームを着て白いボートを漕ぐ選手の姿は、諏訪湖の花だったという。

一方、湖明館の湖岸部分には砂浜があり、そこに石積みの護岸が築かれていた。護岸が建設されたのは、湖明館の位置する湖岸が諏訪湖の卓越風に伴う波浪が激しかったためであろう。そのため、湖岸から数十メートル沖まで繁殖した葦を防波堤に代用して、貸しボートの係船場が設けられていた(田中、1918:1367)。繁殖した葦と護岸は図7からも読み取れる。この係船場は湖岸を幅6mほど掘り込んで作られており、その上に屋根が設けられ、ボートを釣り上げて保管できるような工夫が施されていた(田中、1918:

1369-1370)²⁰⁾。このような葦の群落は六斗川河口付近まで続き、漁船は波浪が強いときは葦群落の陸側を航行した(田中、1918:1367)。

以上のように、スポーツによる湖畔利用は、鶴鳴館を中心とする北部に集中していた。1928年には、片倉館の開館に伴い、河西徳蔵と金子兵助が主導して、鶴遊館と湖明館を結ぶ湖岸道路が開通した。道路には柳と松を植え、ベンチと電灯を配置して、観光客の散策道路となった(湖柳町区史編纂委員会、1988:129)。片倉家も総工費2万円のうち6千円を寄付している²¹⁾。このことは、湖岸の別荘所有者以外の住民や観光客にとっても、スケートや湖水浴、屋形船などの活動に加えて、景観を楽しむ湖との繋がりが一層深まったと言えよう。

他方、温泉観光地としての発展に伴い、新たな問題も表出していた。吉村・三澤(1931)は上諏訪の温泉研究で、湧出量が乱掘のため過去5年間で若干減少している事実をつきとめたが、この背景には乱掘による温泉湧出量の減少と、保護・管理が社会問題となってきたことがあった。乱掘による枯渇の危機感はそれ以前からあり、1914年には温泉保護委員により保護対策が講じられるようになった。1924年には大和地区で湖底から湧出する三ツ釜温泉を150m引湯して湖岸に共同浴場を設けた(諏訪市史編纂委員会、1976:744)。1926年から上諏訪の青年会が三澤勝衛の指導を受けて温泉調査を開始し始めた(諏訪市史編纂委員会、1976:740)。

そして図5にあるように、鉱泉地が1931年に一斉に登録された。その背後には、対象地域でも温泉掘削の増加により温泉湧出量の減少が問題となったことがある。鉱泉地として登記されることで、行政による温泉の保護・管理の開始を前に、泉源の所有が既得権化される利点があったのである。そのため、鉱泉地の周辺部の地価が高騰したという²²⁾。

V むすび

本研究は、明治期から昭和初期にかけて上諏訪の湖畔で新たに生まれた観光地が産業やレクリ

エーションの近代化に関連していかに形成されたのかを、土地台帳と地籍図をもとに土地所有者と土地利用を復元し、当時の新聞や記録などを通して背景を吟味することにより明らかにした。研究対象地域である上諏訪の諏訪湖畔には低湿地が広がっており、周辺集落の有力地主・製糸家によって干拓されていった。1905年の中央本線開通を前に、対岸に位置する岡谷の大製糸家である片倉兼太郎や尾沢福太郎も工場用地として、あるいは投機的意図を持って対象地域に土地を入手したことが分かった。彼らは岡谷の製糸工場から排出された石炭の燃え殻を船で運び、低湿地を埋め立て土地を造成した。

鉄道開通を前後して、水田や原野が広がる湖畔に3軒の温泉入浴施設と貸席が開設された。うち2軒は製糸場の失敗や士族授産の活用で父親の所有地に投資したものであり、1軒は甲州街道沿いの旧旅館が湖畔へ進出する先駆けとなったものである。これら温泉入浴やお座敷での宴会が行われた温泉入浴施設と貸席を下地にして、近代スポーツが導入された。中でもスケート客は増加し、一週間ほど滞在する者が多かったため、入浴施設から温泉旅館へ業態を変えたり、旅館が湖畔へ進出する動機づけとなったりした。

スケートは1904年に諏訪中学校の体育に取り入れられ、1906年には安価な下駄スケートが発明されて、湖畔住民に広く普及していった。欧米の外交官や大学生も東京から訪れ、スケート技術が上諏訪に伝えられた。正月休みには東京方面からスケート客が押し寄せ、2月上旬まで地域住民によるスケート大会が行われた。その後、学生連合大会をはじめとする様々なスピードスケート大会やフィギュアスケート、アイスホッケーなども導入され、上諏訪は日本におけるスケートの中心地となっていった。

結水した諏訪湖の湖面は「油氷」と呼ばれるほど滑らかで、降雪も少ないためスケート客に珍重された。中でも主要なスケート場となったのは、対象地域の北部にある鶴遊館沖である。鶴遊館沖には釜穴と呼ばれる温泉湧出点があるものの、その経営者が湖面と陸地の遷移地帯に土地所有権を所有していたことが、漁業者や採氷業者との軋轢

を避けて、湖面へのアプローチや棧橋設置を可能にした。またこのことが、鶴遊館において夏季には湖水浴客が諏訪湖で最も多く、諏訪中学校のボートレース会場となるなど、レクリエーションの拠点形成に繋がった。

諏訪地域の新聞や記録によれば、1925年には、上諏訪観光は冬季のスケートと夏季の納涼が中心であり、臨時列車を仕立てて団体客が訪れるなどマスツーリズムの嚆矢がみられた。1936年になると、2月上旬までだったスケートに加えて、霧ヶ峰へのスキー客が4月上旬まで上諏訪を基地とし、上諏訪観光の長期化に貢献していた。このような多客期の延長努力に加え、上諏訪は八ヶ岳や北アルプスなどへの登山基地にもなり、上諏訪観光は通年化しつつあった。

このような温泉とスポーツで生まれた賑わいを背景に、岡谷の大製糸家や酒造家が1910年代半ば以降、対象地域で別荘を建て始めた。岡谷は燃料炭の煤煙などで環境悪化していたため、上諏訪駅からも近い対象地域に迎賓の機能を持たせたと考えられる。1930年代には上諏訪の醸造家やバルブ工業家も別荘を建てるようになった。製糸業が主導してきた経済発展が諏訪湖畔の他業種へも波及していたことが伺える。1928年には製糸最大手の片倉兼太郎が女工の福利厚生や地域貢献のために温泉入浴施設の片倉館を建てた。また1930年頃には、別荘を改築して温泉旅館経営に乗り出す製糸家も現れた。

しかし、上諏訪の観光地化に伴う温泉掘削の増加により、1914年頃から温泉湧出量の減少という問題が顕在化していた。対象地域でも1931年には温泉の泉源が鉱泉地として多数登記されており、自治体による温泉の保護・管理の開始を前に、泉源の所有が既得権化されていた。このような問題もはらみながら、上諏訪の湖畔では断層線から湧出する温泉と内陸高地の湖を活用したスポーツが東京をはじめ大都市から観光客を呼び寄せ、製糸業とそこから波及した産業による資本が後ろ盾となって、温泉・スポーツ複合型観光地が形成された。

注

- 1) 対象地域の湖柳町在住の中山哲夫氏への聞き取りによる。
- 2) 鷺ノ湯社長・伊東克幸氏への聞き取りによる。
- 3) 開墾した土地の税を一定期間免じた制度であり、官有地を開拓した場合は地租を20年間免除された。
- 4) 三澤勝衛作成(1893):『信濃諏訪蚕業家一覽地図』諏訪清涼高校三澤先生記念文庫蔵の地図による。
- 5) 三澤勝衛作成(1893):『信濃諏訪蚕業家一覽地図』諏訪清涼高校三澤先生記念文庫蔵の地図による。
- 6) 片倉兼太郎の所有地の中で最古の記録があるもの(中濱670-32番地)は、1878年に嶽下年期が設定され、1917年の初代兼太郎の死去時に所有権保存されるまで、土地台帳に記録がない。この土地は低湿地であり、所有権者が法律上不明確な状態で片倉兼太郎が主体的に埋立てを進め、造成したものと考えられる。法務局への聞き取りによれば、低湿地は「原野」とされ、課税対象外だったため、法務局もあえて所有者を確定しなかったという。このように明治初期から中期にかけて所有者が不明確な土地は、対象地域に比較的多い。
- 7) 鷺ノ湯社長・伊東克幸氏への聞き取りによる。
- 8) 南信日日新聞1923年7月30日の記事による。
- 9) なお、三澤勝衛の温泉研究では、湖明館の温泉が観測されている。それによると、温泉は掘削井戸であり、最高温度は約70℃である(吉村・三澤 1931:247)。
- 10) 鷺ノ湯社長・伊東克幸氏への聞き取りによる。
- 11) 岡谷市(1976:664)によると、小口仙重の製糸工場は、1912年に平野村で起業し、1919年には630釜、754名の職工、14170貫の輸出用生糸を生産している。この工場を山十土地株式会社が1926年に取得していることから、小口仙重は山十製糸経営者・小口今朝吉の同族だったと考えられる。
- 12) 片倉同族と武井覚太郎の別荘の正確な建設年は不明だが、1922年の航空写真(諏訪清涼高校三澤先生記念文庫蔵)で確認できた。
- 13) 1922年湖上博覧会の航空写真(図7)と、隣家である鷺ノ湯社長・伊東克幸氏への聞き取りによる。
- 14) 諏訪湖インあるが社長・有賀 裕氏への聞き取りによれば、湖畔荘は昭和初めにはすでに存在したという。また、1925年に所有者名が尾沢金蔵・福太郎から合名会社尾沢組に変更されていることも合わせて判断した。
- 15) 鷺ノ湯社長・伊東克幸氏への聞き取り(鷺ノ湯の隣に、武井と柳沢の共同出資による湖畔ホテルがあった)と、諏訪湖インあるが社長・有賀 裕氏への聞き取り(柳沢は駅前で柳沢旅館を営業していて、第二次大戦後に湖畔に移って湖畔ホテルを営業した)から判断した。
- 16) 良月生(1922):忘れねばこそ。雑誌スケート, 12月発行による。
- 17) 南信日日新聞1923年7月30日の記事による。
- 18) 南信日日新聞1925年1月18日の記事による。当日にはスケート客がスケート中に釜穴へ落ち、警官と漁師

に救出された記事も掲載されている。

- 19) なお、南信日日新聞で確認したところ、1918年10月29日に秋季ボート競漕の実施が最も古い記録である(10月29日の記事による)。
- 20) 田中(1918)の1594頁には、水上から撮影された写真も掲載されている。
- 21) 南信日日新聞1928年2月28日の記事による。
- 22) 南信日日新聞1931年2月4日の記事による。なお、鉱泉地への地目変更は地租法1931年4月に伴う税務署の指導のもとに実施されたが、源泉所有権の確立により周辺部の地価高騰を招いたという。

文 献

- 江波戸昭(1957):諏訪製糸業地域の変貌過程—農業と工業の結合関係をめぐって—。東洋文化, 24:13-126。
- 神田孝治(2001):南紀白浜温泉の形成過程と他所イメージの関係性—近代期における観光空間の生産についての省察—。人文地理, 53(5):24-45。
- 神田孝治(2003):日本統治期の台湾における観光と心象地理。東アジア研究, 36:115-135。
- 湖柳町区史編纂委員会(1988):『諏訪市湖柳町区史』湖柳町区史刊行会。
- 三澤勝衛(1926a):地理学上より観たる諏訪のスケート(一)(予報)。地理教育, 3(4):355-358。
- 三澤勝衛(1926b):地理学上より観たる諏訪のスケート(二)。地理教育, 3(5):455-461。
- 小口千明(1985):日本における海水浴の受容と明治期の海水浴。人文地理, 37(3):23-37。
- 岡谷蚕糸博物館(1976):『岡谷蚕糸博物館』。
- 岡谷市(1976):『岡谷市史』岡谷市。
- 佐野静代(2003):琵琶湖岸内湖周辺地域における伝統的環境利用システムとその崩壊。地理学評論 76(1):19-43。
- 佐藤大祐・斎藤 功(2004):明治・大正期の軽井沢における高原避暑地の形成と別荘所有者の変遷。歴史地理学, 46(3):1-20。
- 佐藤大祐・斎藤 功(2006):上高地牧場と初期の上高地観光。斎藤 功編『中央日本における盆地の地域性—松本盆地の文化層序—』古今書院, 161-176。
- 諏訪教育会(1986):『諏訪の近現代史』諏訪教育会。
- 諏訪清陵高等学校同窓会清陵八十年史刊行委員会(1981):『清陵八十年史』長野県諏訪清陵高等学校同窓会。
- 諏訪市史編纂委員会(1976):『諏訪市史下巻』諏訪市役所。
- 諏訪市体育連盟(1980):『諏訪市体育連盟史』諏訪市体育連盟。
- 田中阿歌磨(1918):『湖沼学上より見たる諏訪湖の研究』岩波書店。
- 山本嘉市(1911):『スケーティング』山本嘉市先生顕彰碑保存会編1994『山本嘉市と諏訪の体育』山本嘉市先生顕彰碑保存会長立木正純。
- 山本邦夫・棚田真輔(1977):『居留外国人による横浜ス

- ボーツ草創史』道和書院。
- 山村順次（1969）：伊香保・鬼怒川における温泉観光集落の発達と経済的機能—温泉観光地の研究（第2報）. 地理学評論, 42（5）：295-313.
- 吉村信吉・三澤勝衛（1931）：上諏訪温泉の泉質分布（予報）—上諏訪温泉研究その二—. 地理学評論, 7（4）：239-262.
-